

わたしたちも、取り組みました

「授業づくり観のアップデートを」

知的障害教育部門小学部
松原 大樹 教諭

「算数って面白くて奥が深い、子ども達にもこの面白さや数の便利さに気づいて欲しい」事前検討会や授業整理会を通して抱いた私の思いである。

今年度参加した教科指導リーダー養成研修の研究授業は、算数科小学部3段階Dデータの活用『わかりやすくせりりしよう』で行った。初めに校長に相談したところ、「学年の先生方と一緒に事前検討会をして、意見をもらおうといいよ」と助言があった。周りの教員に声をかけると、学年の教員だけでなく、クラスの子とも関わることが少ない教員や管理職など、『授業づくり』に関心のある教員が集まり、事前検討会を行うことになった。

事前検討会では、手書きの授業構想メモや板書案を基に話し合った。「図と表は切り離せない」「抽象的な図に進む前に、具体物を並べることが必要だ」「分散量を整理する手間や、見た目の便利さを実感できるようにしたら？」など、意見が溢れてくる。『授業』が研ぎ澄まされていく感覚を味わった。一見、簡単で単純に見える題材であっても、課題設定や発問一つで、子どもの学び方が違ってくるのだ。私の『授業づくり観』が変容した。

一方で課題も見えてきた。検討会が、いつしか私の思いから外れていき、戸惑うことがあったのだ。きっと、皆さんもそう感じた経験があるのでは？論点から逸れず、検討のポイントに沿って話し合うこと、学び方の形式ではなく、指導事項と学習内容の本質を理解して話し合うことが求められる。授業者の意図や題材と真摯に向き合う姿勢を持ち、私も常にアップデートしながら授業づくりに参加していきたい。



「子どもの姿から評価すること」

知的障害教育部門小学部
直江 祥史 教諭



6年目教諭研修の研究授業は、算数科小学部1段階C測定『多い・少ない』で実施した。1段階の子どもが、多い・少ないをどう理解し判断するのか、振り返りではどう評価すべきか、迷い悩んだまま指導案を書き上げ、検討会となった。校長と私、同僚3人による30分間だ。「教室中をボールプールのボールで埋め尽くす」「多い・少ないに気付けるようにプールの大きさを揃える」など、環境設定や予想される子どもの動きなどについて意見を交わした。

授業では、ボールで満たされた大きなプールを用意。ボールに向かって飛び込む子、走り回りながら「ざっばーん！」とつぶやく子、床に足が着いて安心なボールの少ないプールで遊ぶ子など、多い・少ないを体感し満喫する姿があった。

授業整理会では、固定観念を覆された。「今日の授業で振り返りは必要だったのか」と。授業の終わりには、『振り返りの時間の設定』が当然だと思っていた。しかし、それは、ただの思い込みだったのだ。指導主事からは「環境設定により子どもの主体的な行動や言葉を引き出した。それらを評価すべきだ」と助言を得た。

授業の構想段階から検討会を開いていれば、自分の迷いも整理できただろう。さらに、同僚の意見を聞き、修正を加えて授業に臨んでいたら・・・と悔やまれた。

「子どもが思考する授業の手ごたえ」

知的障害教育部門小学部
山下 美佳 教諭

マスター教員となって、毎年ストレスに感じるのが公開授業である。授業に関して全く検討されず、不安を抱えながら授業を公開していた。

今年度の公開授業では、管理職や小学部の教員の有志で、指導案検討会を行った。題材は「さるかに合戦」。まずは、手書きの授業構想を配付。話し合いは、中心発問の吟味で盛り上がった。私は「サルは何をした」を中心発問とし、動作化することで内容を理解することをねらいとしていた。「子どもが主体的に考えたいか？」「単なる事実確認では？」などの意見が挙がった。国語科C読むことの授業は、作品の内容を理解した上で、叙述に沿って想像力を働かせて、課題を探究するところに面白さがあることに気づかされた。

授業では、子ども達に「どうしてカニは泣いたのか」と投げかけた。「痛かったから」にとどまらず、「カニがつくった柿だったのに・・・」「サルはおにぎりも食べたのに・・・」など、カニの心情を想像した発言があった。子ども達が、学びの足跡、叙述や挿絵の読み取りなど、これまでに読み取った情報を総動員して思考した結果であった。国語の授業の醍醐味を少しだけ味わえた気がした。複数の視点で指導案検討をすることの意義を、改めて実感した公開授業となった。



授業づくりパッセージ

「つながる、ひろがる授業づくり・授業改善」

石川県立いしかわ特別支援学校



授業づくりパッケージって？

1 構想

構想

- 教科書、実践例などの資料収集
- 子どもの実態と指導段階の把握
- 教材解釈、教材・教具開発、ICT活用
- 授業計画、評価計画、環境設定
- 目標が達成できる学習活動の工夫

授業で大切にしたいことを共有



2 検討

指導案検討

- 授業者の意図の共有
- 付けたい力を明確にした単元計画
- ワクワクする探究課題とヤマ場のある展開
- 「目標」と「評価」、「学習活動」の整合性

単元を貫く発問
学びのストーリーづくり



模擬授業

- 子どもの思考を促す発問
- 発問から引き出される反応を予想
- さらに深める問い返しの吟味
- 学習活動の検討

子どもの思考を引き出す
発問の吟味



3 実践

本時の授業

- 子どもが学びの主役となる授業
- 参観の視点の焦点化
- 「子どもの反応・発言・行動」の見取り

教師主導からの脱却



4 評価

授業整理会

- 目標達成と評価に関する考察
- 子どもの反応・発言・行動に基づく子ども理解
- 具体的な改善点を協議
- 得られた成果を日々の授業改善へ

教師一人一人の学びの更新
と日々の実践へ



単元名「泣いた赤おに」 肢体不自由教育部門 国語（中学部2段階）

1

物語文で読解力を育む感情の旅

『泣いた赤おに』を題材に、子どもと登場人物の気持ちの変化を読む旅に出よう！
「青おには、なぜ暴れたの？」
「村人の気持ちはどう変化していったの？」
「赤おには、なぜ泣いたの？」

2

登場人物の複雑な心情を解読する授業の挑戦

登場人物は、赤おに、青おに、村人。
全員の気持ちの変化を読み取るとすると…。
「ちょっと待た！むずかしすぎる！！」
どうやって気持ちを読み取っていくのか？
試行錯誤の日々。

青おにの気持ちの変化にフォーカス

ハードルは高いけれど、青おにの気持ちにフォーカスしよう！
『しばらく考えて』『ぼつりと』
教科書の中の『言葉』に注目して、読み取っていくことに決定！

3

子どもが授業に参加したくなる発問戦略を立てる

『「ぼかぼか」たたかかれているときの青おにとってどんな気持ち？』
「青おには本当にこの作戦をしたかったの？」
模擬授業では『言葉』に注目するための発問にこだわり、子どもの反応を予想しながら発問を修正。



4

“言葉の価値”を探る授業づくりを

整理会では、教科書の『言葉』に注目して青おにの気持ちを読み取り、自分の『言葉』で説明していた子どもを話題に、『言葉』を大切にすることで、読みが深まることを共有出来た。

単元名「山ねこおことわり」 知的障害教育部門 国語（中学部1段階）

1

旧態依然から抜け出す

「登場人物の心情を選択肢から選ぶことは、子どもが心情を想像したと言えるの？」
子どもが自分の『言葉』で考えを表現する授業を目指そう！



2

本質に迫る発問を目指しての試行錯誤

単元を貫く発問に向き合う子どもを目指す。
「小単元ごとの中心発問は？」
「子どもはどんな反応をする？」
「話し合いの形態は？」
「学びの足跡の掲示方法は？」
「本文で大切にしたい『言葉』は？」
細かくイメージして考えた。

3

子ども達の“言葉”と“ペース”で授業が走り出す

いざ本時へ！
すると、子ども達の生き生きとした『言葉』や考えが出るわ出るわ…。
子ども達の『言葉』をつなぎ、子ども達が練り上げていくのを支えることが教師の役割だと、思いを新たに出来た。
「中心発問からズレなければなんでもOK！
子ども達の表現を受け止めよう」



4

“言葉の価値”を探る授業づくりを

中心発問で、子ども達は活発に意見を交わしていた。友だちの意見と自分の意見を比べて試行錯誤する姿を見ることが出来た。
「もっと学びを深めるなら、どんな発問があったのか？」
整理会では、議論が絶えなかった。

